

現代社会と宗教

戦後の日本家族の変容とは

社会や家族、人々のつながりが近年大きく変化している。宗教もその影響を受け、対応を迫られている。本連載(不定期)では、各種の社会調査データを紹介しながら、社会変化と宗教の課題を考えたい。

「標準世帯」という言葉が代わって最も多い世帯構成を占めている。1969(昭和44)年から、総務省統計局の「家計調査」で使われており、会社員の父親と専業主婦、そして子ども2人の4人世帯という構成。かつて日本の最も多い家族形態だった。しかし、「標準世帯」が全世帯に占める割合は、大和総研の推計によると4.6%(2017年現在)に過ぎない。

戦後まだ間もない1950(昭和25)年、産業別の就業者割合は、農林漁業が48.5%だったが、2010(平成22)年、4.2%まで激減した(厚労省「平成25年版 労働経済の分析」)。一方で増えたのはサービス業で9.2%(1950年)から70.6%(2010年)となった。

図1は、自営業主・農業者・町工場・商店などを営んでいる人、家族従業員、家業の手伝い、雇用のサラリーマン、それぞれの人数を示している。自営業主・家族従業員が減少し、雇用のサラリーマンが激増している。雇用のサラリーマンが激増している。雇用のサラリーマンが激増している。

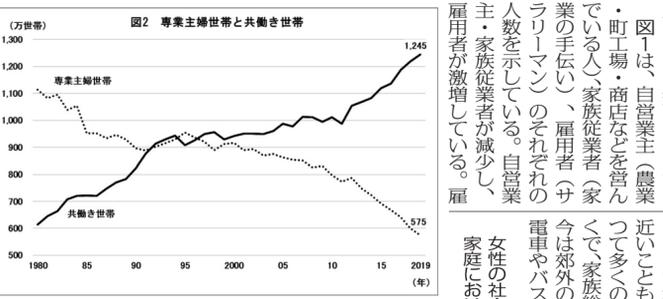
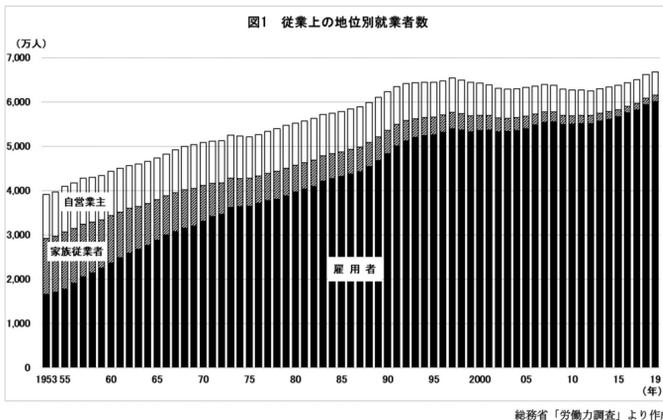


図1 従業上の地位別就業者数 (総務省「労働力調査」より作成)
図2 専業主婦世帯と共働き世帯 (労働政策研究・研修機構のデータより作成)

高度経済成長長期にわたる新宗教の急速な拡大は、主婦たちの社会進出(家庭外活動の増加)と重なっている。専業主婦こそ新宗教の中核を担った人々だった。1986(昭和61)年に「男女雇用機会均等法」が施行され、女性の社会進出(就業)は加速。もちろん女性の高学歴化・キャリア形成・自己表現は、男女平等実現に向けての女性たちの長い社会運動の歴史を背景としていた。

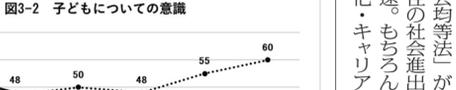


図3-1 結婚についての意識
図3-2 子どもについての意識
NHK「日本人の意識調査」より作成

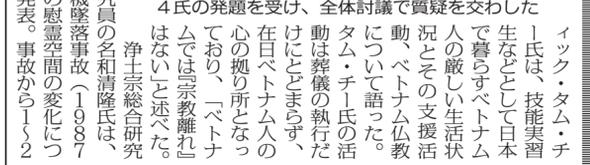
図1は、自営業主・農業者・町工場・商店などを営んでいる人、家族従業員、家業の手伝い、雇用のサラリーマン、それぞれの人数を示している。自営業主・家族従業員が減少し、雇用のサラリーマンが激増している。雇用のサラリーマンが激増している。

図2は、専業主婦世帯と共働き世帯の世帯数の変化を示している。専業主婦世帯は1980年(昭和55年)に約70万世帯、2019年(令和元年)に124.5万世帯に増加した。共働き世帯は1980年に約50万世帯、2019年に57.5万世帯に増加した。

「宗教離れ」時代の宗教を考える

国際宗教研究所(国宗研)島岡進理理事長は2月22日午後1時から、東京・四谷の上智大学で「慰霊をめぐっての現在」をテーマにした「宗教離れ」の時代の宗教を考える」をテーマに公開シンポジウムを開催した。上智大学グリーンケア研究所との合同開催。島岡進理理事長は開会あいさつで、グリーンケア研究所の社会人向け講座は人気があることに触れ、「『宗教離れ』と言われるが、特に東日本大震災以降、慰霊は身近で、タイムリーな話

この後、大阪国際大学教授の三木英氏の進行で4氏が登壇した。日本基督教団石巻光栄教会牧師で被災支援ネットワーク・東北ヘルプ事務局長の川上直哉氏は、東日本大震災被災地支援のエンジニアとして活躍しながら、「現場の神学」という視点で語った。そして「キリスト教は『結婚式教会』に見られるように脱宗教化しており、社会は宗教離れによって、生と死が『劣化』している



「慰霊をめぐっての現在」をテーマにした「宗教離れ」の時代の宗教を考える」をテーマに公開シンポジウムを開催した。上智大学グリーンケア研究所との合同開催。島岡進理理事長は開会あいさつで、グリーンケア研究所の社会人向け講座は人気があることに触れ、「『宗教離れ』と言われるが、特に東日本大震災以降、慰霊は身近で、タイムリーな話

新刊紹介

『戦時下の日本 宗教の国際交流』 中西重樹 大澤 広嗣 編著
本書は、龍谷大学アジア宗教文化研究センターの研究が2016(平成28)年から3年かけて編集・復刻した「資料集 戦時下の日本」の国際交流(10)の巻の関連書籍。2部構成となっており、第1部は、研究班の研究者らが、資料集の過程で明らかになったことをまとめた解説論文集、第2部は資料集に収録された雑誌の総目次となっている。

『戦時下の日本 宗教の国際交流』 中西重樹 大澤 広嗣 編著
本書は、龍谷大学アジア宗教文化研究センターの研究が2016(平成28)年から3年かけて編集・復刻した「資料集 戦時下の日本」の国際交流(10)の巻の関連書籍。2部構成となっており、第1部は、研究班の研究者らが、資料集の過程で明らかになったことをまとめた解説論文集、第2部は資料集に収録された雑誌の総目次となっている。

新刊紹介

『戦時下の日本 宗教の国際交流』 中西重樹 大澤 広嗣 編著
本書は、龍谷大学アジア宗教文化研究センターの研究が2016(平成28)年から3年かけて編集・復刻した「資料集 戦時下の日本」の国際交流(10)の巻の関連書籍。2部構成となっており、第1部は、研究班の研究者らが、資料集の過程で明らかになったことをまとめた解説論文集、第2部は資料集に収録された雑誌の総目次となっている。

『戦時下の日本 宗教の国際交流』 中西重樹 大澤 広嗣 編著
本書は、龍谷大学アジア宗教文化研究センターの研究が2016(平成28)年から3年かけて編集・復刻した「資料集 戦時下の日本」の国際交流(10)の巻の関連書籍。2部構成となっており、第1部は、研究班の研究者らが、資料集の過程で明らかになったことをまとめた解説論文集、第2部は資料集に収録された雑誌の総目次となっている。

はじめて読む法華経28品

『はじめて読む法華経28品』 立松和平 著
2010(平成22)年に亡くなった、行動派の小説家として知られる立松和平は、晩年に仏教に深い関心を寄せた。本書は、その立松が著した法華経28品をわかりやすく解説し、現代に活かすための法華経入門書として、現代に届けたい。法華経の奥義を、現代の生活や思想に照らし合わせて、わかりやすく解説する。法華経の奥義を、現代の生活や思想に照らし合わせて、わかりやすく解説する。

『はじめて読む法華経28品』 立松和平 著
2010(平成22)年に亡くなった、行動派の小説家として知られる立松和平は、晩年に仏教に深い関心を寄せた。本書は、その立松が著した法華経28品をわかりやすく解説し、現代に活かすための法華経入門書として、現代に届けたい。法華経の奥義を、現代の生活や思想に照らし合わせて、わかりやすく解説する。法華経の奥義を、現代の生活や思想に照らし合わせて、わかりやすく解説する。

要請や広報啓発活動、失踪者家族間の交流などを行っている。可能性がある失踪者を調査し拉致被害者を救出する活動を行っている特定失踪者問題調査会(荒木和博代表)が協力。本書では1948(昭和23)年から2005(平成17)年までの特定失踪者25人の失踪時の情報を、家族からのメッセージ、拉致問題に関わる北朝鮮関連記事も交え、年代順に収録した。特定失踪者家族会の今井英輝会長は「まえがき」の中で次のように記している。「政府も北朝鮮との交渉にまだ一歩の進展が見られない状況にあるというのが現実である。中略」『おかせ』と言えない人たちが北朝鮮にあり、『おかせ』と言えない家族が日本をその帰りを待たせていることを知っていたかと思えます。新宗教はこれまで平和活動の一環として、拉致被害者の即時帰国を訴える署名活動並びに学習会を開催したが、本書を通してあらためて拉致問題への関心を高め、拉致被害者の即時帰国を願いたい。(高木書房 四六判 300頁 定価1540円)